

## 1. コラム「論点提起」：若者主導社会や如何

先月（1/24）、9年ほど続けていた某私立大学の非常勤講師としての最終講義（大学院生対象）を終えた。最後の直近3年間はコロナ禍の影響でオンデマンド形式となった。おかげで、一人Zoomで講義を録画し、当該大学のMoodle（eラーニングプラットフォーム）にアップするというやり方を必要に迫られ覚えた。PPT資料もスマホ視聴者も想定して見やすくとどの大学側からの要請もあり、全面的に仕立て直した。最終講義だけは、画面越しでも学生の顔を見て、生の声を聞いてみたいと思い、リアルタイムZoom講義にして、学生相互の討議も行った。

その結果分かったことは、学生にとって、コロナ禍で同じ大学でありながら、学生同士の接点（特に、学科、専攻の異なる学生との接点）が減ったことにより、お互いを知り合う機会に飢えていたことを改めて知らされた。同じ講義を受講している他の学生がどのような考え・思いで当該講義を選択したのか、所属する研究室ではどのような問題意識でどのような研究を行っているのか、当該講義の内容をどのように受け止めたか等が知れて、刺激的だったとのこと。

更には、「学生のうちから様々な分野・領域の人同士がコラボレーションして、何か新しいチャレンジをできる環境を、私たちは日々求めていたのではないかと気が付きました。」という意見もあった。Zoomによる画面越しであっても、相互の意見交換や行動視認ができることは刺激になるということは新たな発見である。それは、リアルでそうした場があればもっと刺激が得られるということを示唆している。大学のキャンパス、研究室、クラブ等は、本来のそうした刺激の場としての空間プラットフォームに価値があるのではなからうか。大学の本来の姿である。

一方で、オンデマンド形式の講義が、個々の学生にとっては受講可能な日時に聴講できることや、限定された講義視聴期間ではあるが振り返りができることに良さがあつたようである。このためか、オンデマンド講義以前の受講生よりも講義内容が伝わっているようであった。個々の学生という観点では、海外での中・高校生活経験者は日本育ちの学生よりも、視点・発想、主張がしっかりしている学生が多く、若いときのグローバル体験の重要性を再認識させられた。

コロナ禍のお陰で、デジタル化が加速され、逆説的に、Realの良さ/必要性も体感し、Virtualのメリット・デメリットがわかったのではなからうか。学生時代のこうした経験が新たな時代の牽引者を育てているものと理解したい。いつの時代も「最近の若者は」と否定的に云われるが、コロナ禍後の新たな地平に向けて「若者こそが」と今後に期待できるのではないだろうか。

失敗のリスクをとり、チャレンジできるのは「若者」の特権である。失敗を乗り越えてこそ、その先にイノベーションを期待できる。1990年以降の成長できない日本社会、失敗を許さない日本社会をブレイクスルーして欲しい。先達はそうした若者を応援し、活躍できる場づくりをする側に廻らないと新陳代謝が進まない。コロナ以前の時代の成功者と云えども、いつまでも「俺が」と居座るようであれば、それこそ「最近の高齢者は」（老害）と云われることになる。

デジタル社会で生まれ育った若者が主導する新たな地平の社会の到来を期待したいが如何。